

ARゲームで最強になろうとしている俺は馬鹿なのか？

フユ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡なごく普通の少年「水本柁」は新しくある日先生にインストール

されたゲーム「フェアリウォーズ」で最強になるため

今日も戦い続ける

目次

第1章 「漆黒の龍と無の鎌使い」

第1話 「水本柩」

1

第2話 「これってARの次元超えてね？」

5

第3話 「裏切者」

8

第1章 「漆黒の龍と無の鎌使い」

第1話 「水本柎」

柎「あく！早く家帰ってARゲームやりてえ！」

悠木「はあ、マサ、君はいつもこうだね、たまには勉強に集中してみるといいんじゃない？」

柎「あく！でもARゲームやりたい！」

先生「じゃあ、水本君ARゲームやっていいわよ？」

柎「やった！先生愛してる！」

この時、俺は知らなかった、先生が出してくるゲームが勉強専用ゲームだとは……

柎「先生！どんな系統のゲームですか？アドベンチャー？ロールプレイング？」

テールブルゲーム？」

先生「え〜っと、多分シューティングかな？」

柎「おっしや！先生！早く俺のブレインスフィアにインストールしてくれ！」

ブレインスフィアとは、ARゲーム専用のゲーム機だ、

遊び方はゲームをインストールする、そしてブレインスフィアを頭に装着してこう唱える「ブレインスフィア！起動！」と

そうすれば、インストールされているゲームが一つならこのまま起動

二つ以上なら選択式で起動するんだ！ハイテクだろ！

先生「脳トレインストールっ」と

柎「先生、今なんつった？」

先生「ゲーム、インストールって言ったのよ？」

今思えばあながち間違いではなかったな、まあ、一日でクリアした俺も俺だが

悠木（先生、先生、いったい何のゲームをインストールしたんですか？）

先生(脳トレだよ、いくら水本君でもゲームなら勉強すると思つて) 悠木(……大丈夫かなあ?)

〔インストール完了しました、いつでも起動可能です〕

柗「おし来た！ブレインスフィア！起動！」

〔脳を鍛えるARトレーニング、起動します〕

柗「……今なんつった？」

〔脳を鍛えるARトレーニング、起動します〕

柗「ARゲーム内でも勉強かよ！ログアウト！ログアウトオオオオオ！」

〔このゲームはクリアするまでログアウトできません〕

柗「いやああああ！」

急に世界が組み替えられる、傍に悠木と先生はいるが、こつちの声は一切

聞こえないだろう、なんせこの世界は現実世界であり、現実世界でないのだから

〔基本の5教科のうち何を勉強しますか？きまつたらウィンドウから選択してください〕

との言葉とともにシステムウィンドウが出てきた国語、数学、理科、社会、英語の中から

選べ、と、え？得意な教科？四六時中ゲームと部活の俺にそんなのはない！

さて、まじどうしよう、こんなことなら先生の話を信じなきゃよかった

柗「うゝむ、どうしよう？」

く30分後く

悠木「先生、マサとても長くないですか？もしかしてかなり難しい問題に

ぶつかっているんじゃない？」

先生「……まだ科目を選択していない」

悠木「ハア？」

先生「くっ！こうなるのであれば勧めなければよかった！」

悠木「で、でも先生、これでマサの勉強への意欲が！・・・
変わらないかもしれないね・・・」

「さらに30分後」

柩「あー！ランダムボタンあるじゃん！なんだよ！最初っからこれを選べば

よかったじゃくん！」

「ランダムが選択されました、教科をランダムで設定します」

柩「おしゃこい！今の俺はどんな問題でも軽く超えられるぜ！」

「教科は社会が選択されました」

柩「よし！社会か、どんな問題でもこいや！」

「問題1」

徳川の16代目の将軍の名前を答えなさい」

柩「ファツ!?徳川16代目の将軍!?!誰それ!習った!?!」

「その頃ゲーム外では」

悠木「先生、マサ、問題に突入できませんでしたか？」

先生「はい、ですが、一問目で詰まっていますね」

悠木「問題は何ですか？先生」

先生「徳川16代目将軍の名前を答えなさいです」

悠木「それって確か徳川家達ですよね」

先生「はい、でも柩君は一切わかってないようです」

「ゲーム内」

柩「おい！ヒント！ヒント！プリーズ！」

「ヒントは最初の使用者により使用できなくなっています」

柩「・・・先生、帰ったら覚悟しとけ

こうなったらあてずっぽうだ！徳川家達！」

「違います」

柩「くっ！やはり違ったか！」

「ゲームの外にて」

先生「あれ？水本君、徳川家達って言ったのに間違えている・・・
？」

悠木「もしかして、いえさとじゃなくていえたつって言ったんじや

ないんですか?」

先生「……. ほんくらいOKでもう良くない?」

悠木「先生、それはなしじゃないですか?」

先生「……. そうですね」

↳30分後↳

榎「これなら! 徳川いえさと!」

〔正解です、クリアおめでとうございます〕

榎「あれ? 一問でクリアなの?」

〔はい、クリアするまで1時間以上かかっているので一問でクリアです〕

榎「おっしやあ! クリア!」

〔ログアウトを実行します、あと、30秒待ってください〕

榎「よし、」

↳ゲームの外では↳

先生「おや? 水本君やつとクリアしたみたいですよ」

悠木「おつ、やつとですか?」

先生「はい、はあ、仕方ないので、例のやつ、インストールさせましょうかね?」

悠木「あ! 先生、なら僕にもお願いします」

先生「わかりました、じゃあ、今のうちに悠木君にはインストールしましょう」

悠木「はい! さあ〜て、武器は何にしようかなあ〜」

〔インストール完了しました、いつでも起動可能です〕

悠木「ブレインスファイア! 起動!」

〔フェアリイウオーズ、起動します〕

榎「ちよつと待てイ! 先生! なぜ悠木だけなんですか!?!」

先生「はいはい、フェアリイウオーズ、インストール」

榎「悠木! 待ってる、すぐ行くからなッ!」

〔インストール完了しました、いつでも起動可能です〕

榎「行くぜ! ブレインスファイア! 起動!」

こうして俺は新たな世界に旅立った……

第2話 「これってARの次元超えてね？」

柩「ブレインスファイア！起動！」

その声とともに世界が組み替えられる

さつきまでいたはずの先生と悠木の姿が見えなくなる
あれ？これってARの次元超えてね？

周りの世界は元いた教室とは全く姿が変わり

店のような姿になった

（いらっしやいませ、フェアリーウォーズへようこそ

まず初めに種族を選択してください）

という言葉とともにシステムウインドウが出てきた
種族

- ・シルフ
- ・スプリガン
- ・レプラコーン
- ・セイレーン
- ・エインセル
- ・シルキー
- ・サラマンダー

柩「うお！たくさんある、そうだ！説明を聞こう！

システムコール！エクスプレイン！シルフ！」

（シルフの説明をします、シルフは風属性魔法を

得意とします、他には素早さが高く

軽い武器ならたくさん連撃ができます）

柩「へえ、じゃあ次

システムコール！エクスプレイン！スプリガン！」

スプリガンの説明をします、スプリガンは

闇属性魔法や特殊効果魔法、

特に邪魔系の魔法が使えます

他には、ダンジョンの中にある宝箱を

探知できる能力もあります

2番目に人気がありません」

柁「ひでえなおい！じ、じゃあ次

システムコール！エクस्पレイン！レプラコーン！」

〔レプラコーンの説明をします、レプラコーンは

鍛冶スキルを得意とします、武器に困ったら

自分で作るなんてことができます〕

柁「へえ、じゃあ次

システムコール！エクस्पレイン！セイレーン！」

セイレーンの説明をします、セイレーンは、

水属性魔法や治癒魔法、特殊効果魔法とくに

手助け系を使えます

この種族を選べば一人でダンジョン攻略ができます」

柁「システムコール！エクस्पレイン！エインセル！」

〔エインセルの説明をします、エインセルは

無属性という、属性を持たない属性を使えます

これといった特殊な能力はありませんが

その武器に応じた特技をたくさん使用できます

ぶつちぎりの1番目に人気がありません〕

柁「へえ、人気がないのか、じゃ、俺はこれにしよつと」

〔エインセルでいいのですね？〕

柁「おう！」

〔肉体をエインセルの構造に組み替えます〕

柁「おいッ！もはやこれARの次元超えてるぞ！

俺のARを返せ！」

〔フェアリィウオーズをアンインストールしますか？〕

柁「うおい！なぜだ！なぜそうなる！答えがNOだ！」

〔了解しました、使用武器は何にしますか？

メインとサブ、二つ選択してください〕

その言葉とともに入力式システムウィンドウが出てきた

柁「え、つと、メインを鎌、サブを短剣つと・・・」

〔了解しました、では、最後に名前を決めたらその

名前と一緒にフェアリウオーズ、起動と叫んでください」

柎「え〜つと、名前は、覚えやすくミズキでいいか、

プレイヤーIDミズキ！フェアリウオーズ！起動！

その言葉とともに俺の周りに出ていた無数のウインドウが消えた

悠木「遅かったね、マサ、僕はとつくのとうに

完了していたよ」

ミズキ「ああ、ごめん、あと俺のここの

プレイヤーIDはミズキだ」

悠木「へえ〜ミズキかあ、僕はユウキだよ」

ミズキ「うわ、すげえそのまま」

ユウキ「悪かったね、そのままで」

ミズキ「そうだ、ユウキ、お前の種族はなんだ？」

ユウキ「僕はシルキーだよ、この妖精は光属性魔法を得意と

するんだって」

ミズキ「俺はエインセル、1番人気ないってきいたから

選びたくなつた」

ユウキ「へえ〜そうだ！マサ！パーティくまない？」

ミズキ「ここでも、その呼び方かよ、いいぜ、

いつとくが俺は最強を目指しているからな

無茶するぜ？」

ユウキ「そうか、じゃあ、ヒーラーも雇わないとね」

ミズキ「おいッ！そこは「大丈夫だよ、僕が君を守るって

いうパターンだろ！」

ユウキ「え？そうなの、ごめんね、マサ」

ミズキ「はあ、もういいよ、もうこれで

落ちて明日ヒーラー探そうぜ」

ユウキ「そうだね、じゃあ」

ユウキ&ミズキ「システムコール！ログアウト！」

第3話 「裏切者」

柩「そろそろ約束の時間だな．．．よし！

ブレインスファイア！起動！

プレイヤーIDミズキ！フェアリイウオース！起動！

その言葉とともに世界が組み替えられる

俺の家は形はそのままだが中がかなり

変わっている

武器を収納する部屋があったりする

ミズキ「えくつと、集合場所は桜台中学だっけ

よし、行こう！」

くそして少し歩いたところく

??? 「キヤツ！」

ミズキ「あ！ごめん！大丈夫かい？」

??? 「あ、大丈夫です、あの、始めたばかりですか？

フェアリイウオース」

ミズキ「ああ、一昨日始めたばかりだよ？」

??? 「あの、もしよかったら一緒にレベル上げしませんか？」

ミズキ「いいけど、友人と一緒にでもいい？」

大丈夫、悪い奴じゃないよ」

??? 「はい、わかりました、えつと．．．」

ミズキ「あ、自己紹介がまだだったね、俺はミズキ、よろしく」

アクア「あ、えつと、私はアクアです、」

ミズキ「よろしく！アクア！そうだ！使用武器は何？

それに合わせたレベル上げ場所決めるから」

アクア「えつと、片手直剣です」

ミズキ「なるほど、俺の仲間も片手直剣だから、

そいつに習うといいよ」

アクア「はい、わかりました、どこに行けばいいんですか？」

ミズキ「あ、俺と一緒に来いよ、案内するから」

アクア「わかった、ミズキ君」

ミズキ「ああ、任せとけ！アクア！」

〈集合場所〉

ユウキ「で、僕との集合に遅れた挙句、女の子をナンパしてたの？」

ミズキ「してねえよ！」

アクア「大丈夫、何にもされてないです」

ミズキ「なあ、アクア、敬語じゃなくてタメ口でいいぞ？」

アクア「うん、わかったよ、ミズキ君」

ユウキ「僕を忘れてイチャイチャしないで」

ミズキ「してねえよ！大体あつたばかりで

すぐイチャコラっておかしいだろ!？」

アクア「私は大丈夫」

ミズキ「いや、こつちが問題大ありなんだよ！」

アクア「なんで？私のこと嫌い？」

ミズキ「待て！なぜ出会って数分で修羅場になる!？」

それがおかしい！あと、嫌いではない！」

ユウキ「まあ、そのことは置いといて、ねえ、アクアさん？」

アクア「アクアでいいよ？」

ユウキ「・・・アクア、君の種族は？」

アクア「セイレーン」

ユウキ「なるほどね、ヒールは覚えてる？」

アクア「はい、」

ユウキ「なるほどね、アクア、僕らのパーティに入る？」

アクア「・・・今回のクエストで決める」

ユウキ「了解、場所はキーラリオの洞窟にしようか

そこには火属性の魔物がおおいし、」

ミズキ「OK！そうだ、現時点でのレベルと自己紹介をしようぜ！

まずは俺から！俺はミズキ！種族はエインセルでレベルは5だ！」

ユウキ「僕はユウキ、種族はシルキーレベルは・・・6」

アクア「私はアクア、種族はセイレーン、レベルは3です」

ミズキ「おっしや！じゃあキーラリオの洞窟に行くか！」

この時の俺は、あいつの不敵な笑みに気付かなかった・・・
まさか、あいつのせいであんなことになるなんて・・・
くキーラリオの洞窟く

ユウキ「ついたね、確か真ん中の道が一番安全だったと思うから
行こうか」

ミズキ「おう！俺とストーンサイスに敵はいないぜ！」

アクア「ピンチになったら言ってるね、すぐ回復するから」

フレイムラット「キャキー！」

ミズキ「フレイムラット！」

ユウキ「せいっ！」

ユウキはソードスキル単発技へライトスラッシュを発動した

ユウキの剣が青く発光し、フレイムラットの体を真っ二つにする

フレイムラット「ギャキー！」

その言葉とともにフレイムラットはポリゴン粒子となって
消滅した

アクア「あ、レベルアップ」

ミズキ「俺もだ、新しいスキル二連撃へデュアルサイスを
覚えた」

ユウキ「：僕もだね、スキルは・・・覚えてないや」

俺とユウキとアクアはどんどん奥に進んだ

そこで、起こってしまった、最悪の裏切りが・・・

ユウキ「痛ッ！」

アクア「どうしたの？大丈夫？」

ユウキ「大丈夫、ちよつとそこら辺の岩で切っただけだから」

アクア「うくん、これはちよつと時間かかりそう

ミズキ君、先に行つてて」

ミズキ「んあ？ああ、わかった

先行つてるから、治ったらメツセージ飛ばしてくれ」

そして少し歩いたところで・・・

キーラリオ「ギヤース！」

ミズキ「こいつはッ！キーラリオ！なぜここに！」

アクア「ミズキ君！逃げ・・・て」

ミズキ「アクア!?どうした！ユウキ！大丈夫か!？」

ユウキ「アクアさんなら大丈夫、ただ、麻痺毒で眠ってるだけだから、ま、眠らせたの・・・僕だけどね？」

ミズキ「ツ！ユウキ！何で！」

俺はすぐさまユウキの方を向く

ユウキ「遅いよ」

ユウキの剣が青白く輝くユウキはソードスキル

四連撃へシャイニングストライクを発動したのだ

ミズキ「ぐっ！」

俺はすぐにガードの体制をとったが後ろにいる

キーラリオにすぐ崩される、そして俺に

シャイニングストライクが直撃する

ミズキ「がはっ！ユウキ！てめえ！」

ユウキ「チツ、耐えたか、だけど、マサ、君のライフは

もうレッドゾーンだよ？」

ミズキ「ぐっ（回復薬を使ってる場合じゃない！かと言って突っ込んだら殺される、くそっ！どうしたらいいんだ！）」

ユウキ「さあ、死んで、僕のためにねえ！」

「そこまでだ」

ユウキ「チツ、騎士団長がきたか・・・」

「君、どういうつもりだい？彼は初心者だ、

殺したって、いいことはない、そしてこのゲームのルールは

PK禁止のはずだ、なぜしてる」

ユウキ「・・・僕の目的のためですよ・・・」

騎士団長ラインハルトサン」

ラインハルト「そうか、じゃあその目的を教えてください」

ユウキ「いやだと言ったら？」

ラインハルト「力づくでも聞く！システムコール！

プレイヤーIDラインハルト！デュエルスタンバイ！

{相手プレイヤーを選択してください}

ラインハルト「ミズキって君かい？」

ミズキ「はい・・・あつちで寝てるのはアクアです」

ラインハルト「わかった、じゃあ、これだね」

（これより、ラインハルトVSユウキのデュエルを開始します

決着方法は何にしますか？）

ユウキ「あなたが決めていいですよ？」

ラインハルト「初撃決着！」

（デュエル開始まで5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・開始）

ラインハルト「うおおおおお！」

ユウキ「はあああああ！」

この瞬間、二つの閃光がぶつかりあった・・・